

小特集 水土文化遺産

特集の趣旨

平成13年12月、農業土木学会ビジョン検討委員会は『新たな 水土の知 の定礎に向けて』を策定しました。そこには、水と土が生物圏の循環に深く関与し、生存基盤の最も基礎にあること、とりわけわが国では水と土は自然そのものではなく、循環の仕組みを増進しつつ恵みが受け入れやすいように人工物が組込まれて基盤として形成されていること、また、これを維持・運営するため、社会集団や制度、儀礼、年中行事、慣行などを伴っていることなどが示されています。さらに、水土の知 は、水と土を中心に据え、人を介して水土に及ぶ複合系が有する全体性を反映し、対象が広範囲にわたること、基盤は長期にわたって機能し続けることから、過去を踏まえ将来を見据えて長時間にわたる視野を持つこと、地域の課題に応じて水や土、作物など個別の関連分野の知を総合化し、水土を形成、維持していく手法であること、知を体得し、水土に働きかけてその仕組みを助長する水土の知の集団を形成してきたことを特徴とし、私たちがその系譜の上に位置していることにも触れられています。

連続として受け継がれる中でときに時代に応じて変化してきた水、土、そしてこれらに係る知に基づき、将来にわたりその健全な姿を維持・保全、さらには発展させていくことが私たちの責務ともいえます。このとき、『温故知新』という諺にもあるように、その歴史的変遷に学び、また反省する所はきわめて大きいのではないのでしょうか。

本特集では、水土にまつわる文化遺産をテーマに、遺跡(遺構)、伝承、歴史、伝統などをキーワードとして有形か無形か、活用中か否かなどに関わらず幅広く、『温故知新』のため、『水土文化遺産』の事例などを紹介いたします。

1. 水土文化の原風景

佐藤 常雄

江戸時代末期の伊万里焼の絵皿に描かれた農村風景の絵画資料から日本における「水土文化の原風景」をさぐってみたい。内径1尺の染付絵皿は、水源となる霊山の麓で稲作の初めと終わりをそれぞれ象徴するモノとして蛇籠と案山子を左右対照で描いている。ただし、絵皿には人物は一切登場しない。しかし、霊山・蛇籠・案山子の三者を結び付けるのは農民であり、日々の暮らしにかかわる人々の四季を通してのいとなみである。また、蛇籠と案山子は現在の暮らしにおいて再評価される存在となっている。ここに「水土文化の原風景」を見出すことができる。(農土誌73 1, pp 5~8, 2005)



江戸時代、農村風景、水土文化、伊万里焼、霊山、蛇籠、案山子

3. 水土文化遺産研究の地平

広瀬 伸

水土文化研究の意義は、私たちの「学」の視野を共時的にも通時的にも拡大することである。水土の知を継ぐ者として、今後基礎的な学問的知見を提供し、蓄積していくため、水土文化遺産に関わる研究の地平を展望する。水土文化を施設群・制度群・知識群からなる基礎とその周縁を取巻くさまざまな要素と概念を規定し、その構造・動態を読み解くことの必要性を指摘した後、史実を扱う問題意識と評価の物差し、研究の方法論などについて、先行諸分野の例を参照しながら論じる。

(農土誌73 1, pp.13~18, 2005)



水土、歴史、文化、技術史、伝承、遺産の活用

2. 水土文化研究のフレームワーク：民俗学の立場から

小川 直之

水土文化研究の課題・内容について、民俗学の立場から論じたもの。水土文化とは、人間が自然環境に働きかけながら育んできた経験的知識や技術、思想の総体を表し、その研究の課題は、それぞれの地域社会で人間と水土との関係システムがどのように構築され、それがいかに資産化されているのかを明らかにすることにある。こうした課題に対する具体的な視点として、水土文化を人間と水土、社会、神との関係性の中に、さらに水土と社会、水土と神との関係性の中に水土文化の諸相を見ていくことを、稲作の神、稲魂、稲の種初、自然暦、小字地名など、具体例をあげながら論じた。そして、こうした視点で全国各地の水土文化に関する実態調査を行い、文化モデルを指定しながら研究を蓄積することが、水土文化研究のフレームワークになるとした。(農土誌73 1, pp 9~12, 2005)



水土文化研究、民俗学、風土、自然観、地名、棚田

4. 東海地方における歴史的水利遺構の成立と存続条件

原山 昭彦

本報は、東海地方における歴史的水利遺構とその用水が成立した起源および水利遺構が現在も存続する背景を明らかにするものである。多くの水利施設は、近代化および更新の過程で大きく変貌してしまった。諸般の事情で事業化されなかったもの、農水以外の者が管理しているものが辛うじて残っている。本報では、筆者が直接現地へ赴き調べた堰・頭首工等の中から現在でも建設当時の原形を保つ11の施設、すなわち庄内用水元杵樋門、忠節用水第二樋門、牧田川用水頭首工、立梅井堰、井生井堰、虎沢用水堰堤、玉野用水堰堤、保古の湖堰堤、立切の各施設と、これらの施設の建設や用水の起源に纏わる史実を紹介する。(農土誌73 1, pp.19~22, 2005)



歴史的水利遺構

複写される方に

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、(社)日本複写権センターと包括複写許諾契約を締結されている企業の従業員以外、著作権者から複写権等の行使の委託を受けている次の団体から許諾を受けて下さい。著作物の転載・翻訳のような複写以外の許諾は、直接農業土木学会へご連絡下さい。

〒107 0052 東京都港区赤坂9 6 41 乃木坂ビル

学術著作権協会 (TEL : 03 3475 5618 FAX : 03 3475 5619) E-mail : kammori@msh.biglobe.ne.jp

5. 知多半島のため池の歴史・現状・多面的機能

近藤 文男

愛知県の知多半島には、多くの農業用ため池があり、県内の約44%を占めている。

知多半島は大きな水源がなく、農業用水を確保するため、多くのため池が作られた。その後、愛知用水の通水により、ため池の補給水として水源が確保されたものの、ため池の重要性は変わっていない。ため池の老朽化、用水の安定供給による農家の意識の変化、都市化の進展等から、ため池の管理・保全に問題が生じている。今後のため池の整備・保全・利活用の際に参考となるよう、知多半島のため池に関する農業土木技術の歴史・昔話・住民活動を紹介、考察する。

(農土誌 73 1, pp 23~26, 2005)



ため池, 知多半島, 黒鍬, マンボ, 昔話

6. 元禄潜穴と品井沼干拓にみる「水土の知」の源流とその未来

田村 孝浩・富田 道久・加藤 徹・富樫 千之

元禄時代に開削された排水トンネル「元禄潜穴」の最たる功績は、洪水の常襲地帯であった品井沼沿岸の洪水被害を抑制し、広大な低湿地における新田開発を初めて可能にしたところにある。また潜穴に垣間見られる計画の合理性や掘削技術は、大地自然の理を見極めた高度な「水土の知」の存在を示す数少ない物証であり、その文化的・学術的価値は極めて高い。本報は、元禄潜穴とこれを契機に進展した品井沼干拓の歴史を紐解き、往時の農業土木事業が果たした役割や理念について考究し、その基本理念が時代を超えて不変不朽であることを再確認するものである。

(農土誌 73 1, pp 27~30, 2005)



元禄時代, 歴史的遺構, 隧道, 排水路, 干拓, 農業農村整備

7. カンボジアのコルマタージュ・システムの歴史と展望

戸田 修・樋口 克宏・宗村 広昭・丹治 肇

カンボジアのコルマタージュシステムの発生過程、成立因子を踏まえ、その展望を考察した。洪水を導入することで後背地に流水客土をもたらすコルマタージュが、プノンペン下流一帯に大きく発展した背景には、洪水の安定的発生、カンボジアの国勢が大きく関与する。また、コルマタージュは農民共同体を形成し、維持してきた。今後、コルマタージュが維持されていくには、一元的な価値観にとらわれることなく、コルマタージュがもつ多面的機能を考慮する必要がある。加えて、改修援助がコルマタージュ環境に与えた影響や、道路建設が洪水域を大幅に減らした事実を踏まえ、より適正な維持管理と、文化的価値を考慮した保存が望まれる。

(農土誌 73 1, pp 31~34, 2005)



コルマタージュ, 流水客土, 農民共同体, 洪水, カンボジア

8. 筑後川山田堰における石張構造の機能について

増野 途斗

山田堰は筑後川中流部4堰(上流側より袋野, 大石・長野, 山田, および恵利堰)の一つであり、寛政(1790)年に築造された石張堰である。本堰は北石張, 南石張, 中舟通, 南舟通, 導水路, 水吐(砂利吐)および水門より構成され、総面積25,370m²が石張にて構築されていることに特徴がある。石張堰における両舟通の配置は、堰上流側の流砂を自然に排砂し、堰下流側において渦流による砂洲を形成させ、堰下流端の洗掘防止対策であることを示した。このように両舟通の排砂と洗掘防止機能、北石張の跳水現象による水制機能および水吐(砂利吐)の排砂機能について示した。

(農土誌 73 1, pp 35~38, 2005)



石張堰, 水制機能, 洗掘防止, 流砂, 舟通

(講座)

生物・社会調査のための統計解析入門: 調査・研究の現場から(その6)
「因果関係を探る」重回帰分析と数量化I類

北野 聡

多変量解析法重回帰分析と数量化I類について、適用の実例と解析結果の解説を行った。重回帰分析の目的は、いくつかの変数に基づいて別の変数を予測することである。予測に役立つ重回帰式を得るためには、多重共線性を避けることのほか、適切な変数選択を行うことが重要である。質的データから量的な従属変数を予測するには、数量化I類が利用可能である。ただし、質的データをダミー変数に変換すれば、重回帰分析の適用が可能になる。独立変数に量的データと質的データが混在する場合には、ダミー変数を使って重回帰分析をすることができる。これらの方法の適用範囲は広く、今後農業分野の研究でますます重要になると考えられる。

(農土誌 73 1, pp 39~44, 2005)



多変量解析, 重回帰分析, 数量化I類, 量的データ, 質的データ